



Title	アナトリアの初期農耕文化と偶像 : チャタルフユック出土偶像の意味
Author(s)	丹司, 正子
Citation	待兼山論叢. 美学篇. 1982, 16, p. 21-46
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48157
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

アナトリアの初期農耕文化と偶像

——チャタルフユック出土偶像の意味——

丹 司 正 子

チャタルフユックは、中央アナトリア南部に位置する前期新石器時代の遺跡で、放射性炭素年代測定法により、ほぼ紀元前6500～5700年という絶対年代が与えられている(図1⁽¹⁾)。本稿は、このチャタルフユックから出土している多くの偶像が、何を表わし、どのような目的で作られたのかについて考察しようとするものである。

I. 先史時代偶像に関する一般的解釈

先史時代の偶像は、地母神崇拝と関係付けられ、地母神像やその配偶神像であるとされることが多い。この時、偶像は以下に示すような機能を表わすものと考えられる。⁽²⁾

1. 豊饒や自然創造の神秘を示す。
2. 人間の子孫繁栄と存続を保証する。
3. 人間や動物を病気から守る。
4. 死者を保護し、死後の世界を治める。
5. 狩猟・農耕・織物などを守護する。

これらの機能を表わす偶像の用途について、ドゥルは次の四つが考えられると述べている。⁽³⁾すなわち(1)祭儀、(2)護符、(3)呪術に用いられ、(4)一部は神話世界の事象の説明に用いられた。

偶像の機能に関する上記の考えは、各地から出土している偶像の形態や出土場所や、歴史時代初期の信仰形態を手懸りとして推定されたものであ

る。形態では、動物との組合わせと出産の姿勢が重視されている⁽⁴⁾。大部分が聖所と考えられる場所から出土していることが、偶像を神像と考えさせる最大の理由のようである⁽⁵⁾。メラートは、女神像が頻繁に野生の動物像と組合わされていることは、狩猟社会以来、狩猟の守護者であったことを反映するものであるとし、また、穀物の山や穀物用の箱の中から発見された偶像があることや、祠所らしい建築址に織物の図柄風の壁画があることから、農耕や織物の守護神としての可能性も推察している⁽⁶⁾。偶像が死者や死後の世界の守護神像であるという考えは、おそらく歴史時代のイシュタール神話などからの推測であると思われる。タイムメによれば、二つの頭や上半身をもつ女性像（チャタルフユックにも1例ある）は生と死という二つの事象を象徴するものである⁽⁷⁾。

以上のように、偶像は宗教的に解釈されることが多い。しかし、これに対してアッコーは、偶像のすべてが明らかに聖所と呼べる場所から出土しているわけではなく、神であることを示す明瞭な印もないことなどから、すべての偶像を宗教的機能をもつ神像であるとは言い切れないと考える⁽⁸⁾。そして、歴史時代のメソポタミアやアナトリアでしか確認されていない地母神崇拜が、旧石器時代以来、他の地域でも存続していたという仮定に立つ宗教的解釈のみを採ることを避け、偶像が人形や玩具として、交換呪術の道具として、あるいは技術指導や練習のために用いられた可能性もあることを指摘した⁽⁹⁾。

これまで示した解釈は、宗教的にしろ非宗教的にしろ、先史時代の偶像全般について試みられたものである。一方、地母神像の系譜を辿る木村重信は、旧石器時代と新石器時代の偶像を区別して捉えている。彼は旧石器時代の岩陰浮彫りや丸彫りの女性像を論じる際に、「新石器時代の農耕社会における、豊饒の象徴である地母神の属性には超越性があり、従ってそれは祈願の対象であったが、旧石器時代の女性像は妊婦の科学的表現で

あって、特に丸彫りの女性像はサイズも小さく、一種の呪物と考えられる。」
と述べている。⁽¹⁰⁾

さて、チャタルフユックの偶像であるが、その形態や出土場所から考えて、人間ばかりでなく動植物をも含めた生物の豊饒・生殖・出産・死というものと無関係であったとは考えられず、むしろ、それらと強い関わりをもっていたのではないかと思われる。しかし、それが現実を越えた地母神やその配偶神の像であり、崇拜や礼拝の対象であり得たという確信はない。

II. 空間観念と偶像

偶像を地母神などの神像であるとするためには、それらを作り出した社会において、彼岸観が確立し、超越的な存在に対する信仰が成立していたことが、まず仮定されなくてはならない。ここでは、チャタルフユックの人々が保有していた空間観念について、埋葬法などから推察してみたい。

メラートは、チャタルフユックの埋葬形式は、ハジュラールやメルシンなどに代表される後期新石器時代や金石併用時代のアナトリアでは見られず、パレスティナのナトゥフ文化やそれに続く無土器文化のものと類似していると指摘している。⁽¹¹⁾チャタルフユックの埋葬法の特徴は次のように整理できる。

1. 赤色オーカーが塗られた遺骸がある。
2. 床下埋葬である。
3. 頭蓋骨埋葬が存在し、頭蓋崇拜の痕跡が認められる。
4. 完全な形の遺骸もその頭の方角は一定ではないが、主に部屋の中央部に向けられている。
5. 二次埋葬が行われ、一年のある特定の時期に数体の遺骸がまとめて埋葬された。
6. 壁画や浮彫りは何層にも重ねられているが、そのほとんどは漆喰で

塗り込められており、定期的な埋葬儀礼に関連して一時的に描かれたと考えられる。

7. 特別な構造をもつ建築址は発見されておらず、祖霊または神々のための永続的な霊廟は建てられていなかったと考えられる。

以上の諸特徴から、チャタルフユックでは靈魂觀念の発生が認められ、死者の世界は彼岸のものとなりつつあるが、それはまだ完全なものではなく、此岸の世界と並列されている部分があり、神話の発生を促すようなものとはなっていなかったといえるであろう。

木村は、先史時代の空間觀念の展開を、埋葬法から次のように説明している。⁽¹²⁾

1. 旧石器時代から中石器時代の初期までは、死体は縛られていたり、赤土が撒布されていたりする。また死体は炉辺に葬られた。これは人々が現実を単純な並列、断絶のない継続としてとらえたことを意味し、この世とあの世の区別がなく、超越的な存在に対する信仰とは無縁であった。
2. 中石器時代中期になると、頭蓋骨埋葬が多くなり、しかも特別な場所に、西を向けて葬られる。したがって、ここでは何らかの靈魂觀念の発生が認められ、死者の世界は彼岸のものとなる。
3. 新石器時代になって、死者のための祭祀が催され、祖霊ないしは神々の住まう霊廟が作られるようになったとき、靈魂は肉体と完全に分離して、彼岸に高まって別の世界に向かう。不可視的なものが不可視的な世界に、つまり天に位置づけられたとき、神話が生まれた。

この木村の図式に従うならば、チャタルフユックの人々はヨーロッパの中石器時代の人々と同程度の空間觀念を保有していたということが出来る。中石器時代的な空間觀念を暗示するものとして、さらに2種類の壁画を挙げることができる。その一つである第V層と第III層の狩猟図(図12)は、

画面構成の意識だけではなく人物描写においても、中石器時代スペインのレバント美術を想起させる。また第Ⅶ層の火山と町を描いたと思われる壁画⁽¹³⁾ (図13)には、近景と遠景を関係づけようとする意識が見られる。これらの壁画には、明らかに構図意識が働いており、現実空間から切り離された自由空間が獲得されつつある。しかし、表現の抽象化の傾向は顕著でない。

上述のように、農耕村落共同体の最も古い遺跡の一つであるチャタルフユックでは、埋葬形式や壁画から見て、旧石器時代とは明らかに異なり、観念的空間意識が生長していたが、それは未だ前時代的なものであり、宗教と言い得るもの——ある特定の儀礼を行うに際し（例えば豊饒や出産の成功を祈念し）、その原因を超越的な存在に求めようとする社会的な感情規定——は成立していなかったと考えられる。すなわち、チャタルフユックはエリアーデや木村がいうところの新石器時代的な空間観念の発展段階に至っていなかったのである。従って、チャタルフユックの偶像を考察するに当たって、「主な豊饒神を特徴づけている牛の角は、大母神の標章であり、新石器時代の文化において、牛の角のあらわれているところには、どんなところでも、豊饒の大女神が君臨している。」というエリアーデの考え⁽¹⁴⁾方や、地母神の系譜を辿り、新石器時代の農耕社会における女性像を祈願の対象として認めた木村の考え方⁽¹⁵⁾に囚われる必要はないと思われる。

チャタルフユックの偶像が神像でないとすると、いったい何であったのか。私は、これらはあくまでも人間の像であり、当時の人々が「人形（ヒトガタ）」として作ったものであると考えたい。このことは、以下の章で示すように、偶像の特徴を踏まえ、第Ⅶ層 (c. 6050 / 6070 ~ 5880 B.C.) を境として認められる遺物の変化に注目することにより推察される。第Ⅶ層を境とする変化は、農耕村落共同体であるチャタルフユックにおいて、主たる生活手段としての狩猟が復活した可能性を暗示するものである。

Ⅲ. 偶像の特徴

メラートはその著書の中で、約50点のチャタルフユック出土の偶像を挙げているが、⁽¹⁶⁾発見された偶像のすべてが報告されているわけではなく、正確な出土数は明らかではない。私は、アナトリア文明博物館所蔵の42点の偶像を対象とした。⁽¹⁷⁾42点中34点は、メラートが報告書に掲載しているもので、第Ⅷ-Ⅱ層の建築址内部から出土している。残り8点は報告書に明示されておらず、出土層等の詳細は不明である。また、26点は大理石・アラバスター・石灰石などの石製で、高さは4.2~21.5cmであり、残り16点は粘土製で、1点(16.5cm)を除き、5~8cmの高さである。

本章では、個々の偶像の詳細は省略し、偶像の意味に関わると考えられる特徴について考察する。

ⅰ. 男性像が存在する

チャタルフユックの偶像には生殖器が表わされていないため、性別がつけ難いものもあるが、42点のうち6点が男性像であると考えられる(図2-3)。これらはすべて第Ⅵ層以前の層から出土しており、その後の層からは全く発見されていない。アナトリア全体を考えても、その後ヒッタイトの暴風神テシュプが出現するまでの約4千年間、男性像はほとんど発見されなくなる。

チャタルフユックの時代には、大地はあらゆる生命の母胎として、すべての生の契機を含むものとして捉えられていた。従って、それは男性をも女性をも含む両性的のものであったと考えるならば、そして女性像が、何らかの意味で、大地と結びつけて考えられていたとするならば、男性像も、後の神話に従った属性をもつ男神像とは異なり、同時代の女性像と同様の機能をもっていたと考えられるべきである。

ii. 動物を伴う像が存在する

1匹または2匹の動物を伴う偶像が8点ある。動物は2種類——牡牛とヒョウ——に限られている。男性像の場合、牡牛に跨っているもの(図2)とヒョウに跨っているもの(図3)があるが、女性像では、動物の背に跨っている例はなく、ヒョウを後ろから抱きかかえるようにして立っているもの(図4)と2匹のヒョウの子供を抱いているもの(図5)、そして2匹のヒョウを両脇に従えて座っているもの(図6)がある。

ヒョウに跨る男性像をメラートは、その体格から、成熟していない男神像すなわち少年神像と呼んだ。⁽¹⁸⁾チャタルフユックでは、子供は母親と同所に埋葬されている例が多いことや、⁽¹⁹⁾時代は下がるが、ヤズルカヤにあるヒツタイトの岩面浮彫りに見られるような太陽女神ヘパトゥとその息子シャルルマの⁽²⁰⁾関係などから推察して、もしこのヒョウに跨る少年像を女性の範疇に入れて考え得るならば、チャタルフユックの偶像では、女性はヒョウと、男性は牡牛と組合わされていたことになる。しかし、壁面浮彫りの女性像は、牡牛の頭部像と組合わされていることが多く、チャタルフユックにおいて、牡牛やヒョウが男女いずれかのシンボルとされていたと断定することはできない。共に、豊饒や多産と関連した何らかの意味をもっていたであろうと想像されるに過ぎない。

iii. 出産姿勢の女性像が存在する

メラートは第II層から出土した女性像(図6)について、それは出産中の女神像であり、足下にある丸い塊は彼女が産みつつある人間または動物の頭であろうと説明している。⁽²¹⁾これは明らかな証拠があるわけではないが、興味深い説である。他に出産の姿勢にあると考えられている女性像は、壁面浮彫り(図9)と、第VI層と第V層の壁面に見出される。この点から考えて、チャタルフユックの偶像は、地母神やその配偶神の像ではないと

しても、おそらく出産や生殖に関連したものであろう。

iv. 着衣像が存在する（図7）

v. 男女の生殖器が全く表現されていない

この二つの特徴は、チャタルフユックの偶像が、アナトリアの金石併用時代や初期青銅器時代の便化された形態をもつ偶像（図9-10）と大きく異なる点である。後者は概して小さく、厚みは薄く、手足は胴体に収斂されていることが多い。また、細部表現はほとんど省略されているが、大部分が裸体像で、乳房や女陰などの女性的特徴がシンボリックに表現されている。平板な身体に最も端的に女性を表現するためには、女性の身体的特徴をボタン様の乳房や下腹部の三角形として表わすことが効果的であるが、そのためには裸体像であることが必要条件であったと思われる。小さく平板な金石併用時代以後の偶像は、護符として身につけられたり、壁や柱に取りつけられていた可能性⁽²²⁾がある。しかし、チャタルフユックの偶像が身につけられるようなものでなかったことは明らかである。それらは非常に写実的である（図5-8）。先のシンボリックな偶像のように、その形態が何を意味するかというような吟味を必要とせず、より実在感がある。この点から、チャタルフユックの偶像には、護符に対してよりもさらに現実的な働きかけが行われたのではないかということが暗示される。

vi. 頭部を欠く像が存在する

調査の対象とした偶像のうち、19点の頭部が欠けている。破損した可能性もあるが、しかし、破損したものならば、頭部だけが幾つか発見されてもよいはずである。現に、後期新石器時代のハジュラールでは、粘土製偶像の頭部が多く出土しており、その中には、頭部を欠く像にうまく接合されたものもある⁽²³⁾。チャタルフユックでは、石製の2例を除くと、偶像頭部

の出土は全く報告されていない。

チャタルフユックの頭部欠損像は次のように整理することができる。

1. 粘土製偶像に多い。
2. 女性像の範疇に入るものである。
3. ヒョウと組合わされた偶像のすべてである。
4. 第Ⅵ層以後の層に多い。

4点の石偶と15点の粘土製偶像の頭部が欠けているが、粘土製偶像の場合、対象としたもののうち1点を除くすべてが頭部を欠いている。また、図3の少年像を、前述のように女性像のグループに入れて考えるならば、頭部欠損像19点はすべて、女性像の範疇に入る。石偶の場合、頭部を欠くものは4点だけであるが、第Ⅲ層から出土した偶像は、同時期の粘土製偶像に近い形の肥満女性で、残り3点はヒョウと組合わされている。

偶像の外に、壁面浮彫りの女性像もその大半が頭部を欠いている。さらに第Ⅴ層の狩猟図壁面に描かれている5人の女性像のうち、メラートが出産の姿勢にあるとした2人の頭部が不明瞭である。壁画については、顔料の剝落や褪色ということも考えられるが、トッドは、壁面浮彫りの女性像の頭部は故意に削り取られた痕跡があると述べており、私は、偶像頭部も故意に切り取られたのではないかと考える。⁽²⁴⁾

さて、メラートの報告に従うと、チャタルフユックには頭蓋崇拜が存在したと考えられる。メラートは、チャタルフユックでは二次埋葬が行われていたことを報告している。⁽²⁵⁾ 赤色オーカーやその他の顔料で彩色された遺骨の存在や、骨の数や位置の混乱が、二次埋葬を示唆している。そして、その埋葬法を暗示するものとして、第Ⅶ層の壁画（図14）を挙げることができる。⁽²⁶⁾ 黒一色で描かれたこれらの壁画は、巨大なハゲタカが頭のない人間に襲いかかろうとしている図である。これは、チャタルフユックの人々

が彼らの葬送の方法を描いたものであり、死者は頭部を切り離され、巨大なハゲタカの集まる場所で鳥葬に付されたのではないかと考えられる。一方、切り離された頭部は、最終的な埋葬が行われるまで、きっとある一定の場所に安置されていたのであろう。その安置場所を暗示するものが第VI層の壁画(図15)である。チャタルフユックの人々は、おそらく、頭部には首から下の身体とはちがった特別な意味を与えていたにちがいない。

鳥葬または他の何らかの方法で肉の除去が行われた遺骸は、ある一定の時期に、建物の床下に葬られた。⁽²⁷⁾第VII層のハゲタカの壁画のある建築址では、4個の頭骸骨が床下ではなく、プラットフォームの上に置かれていた。⁽²⁸⁾この4個の頭骸骨は、壁面に描かれている頭のない人物と関係があるのではないかと考えられる。

オーカーを塗布された遺骸は、特に第VIII—VI層に多く発見されている。体全体に彩色されているものと、部分的に彩色されているものがあり、特に頭蓋骨は入念に彩色されていることが多い。中には彩色された上に眼に紅海産の巻き貝が嵌め込まれている例もある。⁽²⁹⁾これはPPNB期のイエリコやテルラマドで発見されているものと同様の形式であり、頭蓋崇拜の存在を示唆すると考えられる。

チャタルフユックでは、上記のような頭蓋骨の外に、漆喰で作られた牡牛や牡羊の頭部像が多数出土している。本物の牛角が使用されていることが多く、壁に取り付けられていた。これは、牡牛などが儀礼的に重要な意味をもっていたことを示すといわれているが、牡牛やその他の動物の存在⁽³⁰⁾そのものが、頭部に集約されていたことを示すものである。チャタルフユックの人々は、人間や動物の生命はその頭部にこそあると信じていたのではないであろうか。

では、なぜ、生命を集約している重要な頭部が、第VI層以後の偶像から切り落されなければならなかったのであろうか。女性偶像の頭部を切り取

り、浮彫り女性像の頭部を削り取ることに、どのような意味があったのであろうか。

IV. 第VI層における変化

偶像を概観すると、第VI層を境として、次のような変化を見出すことができる。

1. 材質が石から粘土に変わる。
2. 男性像が全く出土しなくなる。
3. 動物（おそらくヒヨウの子供）を抱く像（図5）が、1点ではあるが第III層に出現する。これは、後期新石器時代のハジュラルヘ続くものとして、一つの変化とみなされる。
4. 頭部を欠く像が多くなる。

以上の偶像の変化に加え、他の遺物にも第XIII-IV層と第V-0層の間では次のような変化が見出される。

1. 壁面浮彫りの女性像や多数の乳房を並べたような浮彫りが見出されなくなる。
2. 巨大な牡牛の陰刻やヒヨウの浮彫りが全く見出されなくなる。
3. 漆喰で作られた牡牛や牡羊の頭部が見出されなくなる。また、牡牛の角が何対も据えられたベンチも第VI層で終わり、第V-III層では1対の牡牛の角を付けた低い柱状のもの（Bucranium）がわずかに見出されるだけである。
4. 幾何学文様や手形や花などのシンボリックな図形の壁画に変わって、第V層では狩猟図壁画が突然に現われ、第IV-III層にも同様の図が発見される。これらの狩猟図では、比較的写実的な牡牛や赤鹿やその他多くの動物が、かなり図式化された多くの人物像と共に、一つの画面を構成している。

5. 土器の使用が一般的となる。⁽³¹⁾第ⅩⅡ層以後の全層から土器は出土しているが、第Ⅴ層以後に数量が増大し、一般的使用が認められる。
6. 石器が著しく増加する。⁽³²⁾特に有茎ポイントやエンドスクレーパーなどの増加が注目される。

偶像以外の変化として、以上の6点を挙げたが、さらに埋葬法に関して、次の2点を付け加えることができる。

1. 赤色オーカーを塗布したり撒布した頭蓋骨や遺骨の多くは、第Ⅷ－Ⅵ層で発見されている。⁽³³⁾
2. 乳幼児の埋葬例は、第Ⅴ－Ⅱ層では全く見出されなくなり、子供の埋葬例も非常に少なくなる。⁽³⁴⁾

以上に示した、第Ⅵ層を境とする変化を、本稿では、紀元前6千年紀初頭のチャタルフゴックにおける社会経済的状況に関連づけて考えてみたい。

V. 人口問題と生活手段の動揺

チャタルフユック第Ⅵ層に居住した人口を、アンゲルやメラートは、建築址と埋葬の数から、5,000～6,000人と算定した。⁽³⁵⁾しかし、チャタルフユックの発掘が遺丘全体の30分の1以下しか行われていないことや、発掘地区が祠所などを多く含む特別地区であった可能性があることや、そして一時期に人々が遺丘全体に互って居住していたとは考えられないことから、発掘地区で推定される人口を遺跡全体に敷衍することは難しいとして、トッドは5,000～10,000人という大巾な推定しかできないとする。⁽³⁶⁾

一方、チャタルフユックの人々は、遺丘を中心とする約7850 haの占有地内に、約7,500 haの耕作可能な土地をもっていたと考えられている。⁽³⁷⁾ 休閒地システムを仮定し、年間ヘクタール当り600kgの穀物が生産され、人口1人当り300kgの穀物を必要としたというアランの示唆を受けて、⁽³⁸⁾

トッドは、チャタルフユックの耕作地は約7500人の人口を支えることができた⁽³⁹⁾と考える。さらにトッドは、5000～6000人の人々に十分な動物性蛋白質を供給するためには、1日に3頭の牛または50頭の羊や山羊を必要としたが、家畜を絶滅させることなく年間1,000頭以上の牛を殺すことができる程多くの家畜を飼育していたとは考えられないことや、日々の肉の摂取量が後期旧石器時代の最適条件の5分の1であったというアングルの分⁽⁴⁰⁾折を考慮して、チャタルフユックという村落共同体の許容人口は5,000～7,000人であったと結論している⁽⁴¹⁾。

また、アングルは、人骨資料の分析から、年に0.8%という人口増加率を⁽⁴²⁾推定した。これは、もし紀元前6500年頃に約50人が居住を始めたとする⁽⁴³⁾と、紀元前5800年頃にその人口は、この地域の許容限界に達することを示唆するものであるとして、トッドは、チャタルフユックの文化の転換点を紀元前6000年頃に置いている。彼によれば、チャタルフユックという居住区は、人口増加のため飽和状態になり、最終的には紀元前5600年頃に放棄されるが、その兆しは既に紀元前6000年頃（第Ⅵ層）に現われ始めていたことになる。これは、あくまでも、限られた人骨資料による形質人類学的分析と現代の地質学的調査を基にした仮説である。しかし、発掘調査が中断されている現段階においては、トッドの説は説得力のある仮説として認め得るであろう。この仮説を支持する材料として、第Ⅴ－Ⅲ層の狩猟図壁画を挙げてみたい。

前章で挙げたように、第Ⅵ層までの壁画のほとんどは、幾何学文様や花や手形などの繰り返しであった。それが第Ⅴ層になって突然に、完成された形の狩猟図が描かれたのはなぜであろうか。これらは模擬狩猟の図とも考えられるが、たとえそうであったとしても、それまで取り上げられなかった狩猟が主題とされていることに変わりはなく、第Ⅵ層の後、何らかの理由により、人々の関心が狩猟に向けられたことを示唆するものである。

許容人口という観点からトッドがいうように、「チャタルフユックは、第Ⅵ層の少し後に燃え尽き始めている⁽⁴⁴⁾」という状況が考えられるならば、当時の人々にとって、人口増大に伴う食糧確保は大きな問題であったにちがいない。しかし、農業生産性を革新的に高めたと思われるような改良の跡は何ら残されておらず、従来の穀物生産や牧畜だけでは、急激に増大する人口に十分な食糧を供給することはできなかったと考えられる。そこで、人々は古い生活手段である狩猟に再び力を入れざるを得なかったのではないであろうか。人々が食糧確保のために狩猟の必要性を再認識し、それまで農耕や牧畜に対して従属的であった狩猟⁽⁴⁵⁾が改めて活発化した時代を暗示するものとして、第Ⅴ－Ⅲ層の狩猟図壁画を捉えることができる。

狩猟の活発化は、壁画の外に、矢尻や槍先に用いられた有茎ポイントや、皮なめしの用具として推測されるエンドスクレーパーなどの石器の著しい増加によっても暗示される。また、第Ⅴ層と第Ⅲ層の典型的な狩猟図がある建築址で、男性の埋葬跡が発見されなかった⁽⁴⁶⁾。このことは、狩猟に出かけて戻らなかった男達のために狩猟図壁画が描かれたのではないかという想像を促すものである。

しかし、チャタルフユックの人々にとって、狩猟による生活維持はそれ程容易ではなかったと思われる。アンゲルによる歯の分析も、肉の摂取量の増加を示してはいない⁽⁴⁷⁾。すなわち、新石器革命を経験し、農耕牧畜生活を営んで久しいチャタルフユックでは、その生活環境が旧石器時代とは非常に異なっており、人口増加と食糧不足に際して、狩猟という古い生活手段を取り戻す努力が払われたものの、もはやそれは不可能であり、第Ⅵ層以後の社会は大きく動揺していたと考えられる。

Ⅵ. 「人形(ヒトガタ)」としての偶像

農耕や牧畜、そして狩猟によっても、人口を維持するに足る十分な食糧

を確保できないとき、人々は人口増加を抑える努力を余儀なくされたにちがいない。間引きということも考えられるが、より肝心なことは、子供を産まないことである。子供を産まない方法の一つとして、女性の出産能力を断つことが考えられる。先史時代や未開社会では、女性は母性であるが故にその存在価値が認められていることが多い。そうした場合、女性の出産能力を断つことは、すなわちその生命を断つことでもある。しかし、出産能力のある女性や多産の女性に対して、実際に死を要求することが可能であったとは思われない。そこで考えられたことが、女性の、特に妊婦の形をした偶像を毀すことだったのでないであろうか。先述したように、生命は頭部に集約されていた。従って、偶像も頭部を切り落されてその生命を失い、そして首から下の部分は、その証として残されたのである。代理である偶像の頭部を切り落された女性は不妊となり、妊婦も出産することができなくなったのである。壁面浮彫りの女性像も、同様の理由から頭部を削り取られたと思われる。

以上に述べてきたことから、チャタルフユックの女性像、特に頭部を欠く女性像の意味を考えると、次のような仮説に導くことができる。すなわち、チャタルフユックの女性像は、それぞれが表情や姿勢を異にしていることから考えて、その多くは妊婦である特定の個人を象ったものであり、そしてその身代わり像の頭部を切り落すことにより、実在の女性の不妊や出産の不成功が約束された、と。これらの女性像は、個人に関わる現実的状况を引き出すために行われた呪術儀礼において使用されたものであり、ここに「人形（ヒトガタ）」としての機能を見出すことができる。⁽⁴⁸⁾しかし、この背景には、豊饒や生殖のイメージとしての偶像が存在する。第Ⅵ層以前の完全な形の女性像や男性像は、豊饒や生殖に対する肯定的な立場から作られたものと考えられる。

第Ⅱ章で述べたように、チャタルフユックは農耕村落共同体という新し

い社会形態を獲得してはいたが、人々が有していた空間観念は、ヨーロッパの中石器時代的なものであり、新石器時代以前の要素を未だ強く残していた。だからこそ、この遺跡から出土する偶像も、新石器時代的な尊崇の対象としての神像ではなく、中石器時代的な呪物としての「人形（ヒトガタ）」だったのである。

注

略号

AnSt Anatolian Studies

PEK Jahrbuch für prähistorische und ethnographische Kunst

RHA Revue Hittites et Asiantique

- 1) James MELLAART, "Excavation at Çatal Hüyük: Preliminary Report." *AnSt* VII - XVI (1961 - 66).
- 2) Refik DURU, *Neolitik ve Kalikolitik Çağlara ait Anadolu'da bulunmuş İnsan Figürinleri*, (Istanbul 1969), p. 16; Kurt BITTEL, *Prähistorische Forschung in Kleinasien* (Istanbul Forschung 6), (Istanbul 1934), p. 40; Bernard GOLDMAN, "Typology of the Mother-goddess figurines," *PEK* 20 (1960 - 63), pp. 8-9; Jurgen THIMME, "Die religiöse Bedeutung der Kykladen Idole," *Antike Kunst* (1965), p. 72; J. MELLAART, *Çatal Hüyük: A Neolithic Town in Anatolia*, (London 1967), p. 82.
- 3) R. DURU, *ibid.*, p. 16; Tahsin ÖZGÜÇ, "Kurs Vucutlu Kültepe İdolları," *Ankara Üniversitesi Dil ve Tarih-Coğrafya Fakültesi Yıllık Araştırmalar Dergisi* I (1940 - 41), p. 867; Erich F. SCHMIDT, *The Alishar Hüyük. Seasons of 1928 and 1929* (Oriental Institute Publications Vol. XIX), (Chicago 1932), p. 53; B. GOLDMAN, *ibid.*, p. 9; J. MELLAART, *Çatal Hüyük*, p. 180.
- 4) E.O. JAMES, *The Ancient Gods*, (New York 1960), p. 46; M.E.L. MALLOWAN, "The Excavations at Tall Arpachiyaph, 1933," *IRAQ* II (1935), pp. 79, 87; J. MELLAART, *Çatal Hüyük*, p. 180; J. THIMME, *ibid.*, p. 75.
- 5) R. DURU, *ibid.*, p. 14.
- 6) J. MELLAART, *Çatal Hüyük*, pp. 182 - 183.

- 7) J. THIMME, *ibid.*, p. 72.
- 8) Peter J. UCKO, *Anthropomorphic Figurines of Predynastic Egypt and Neolithic Crete with Comparative Materials from the Prehistoric Near-East and Mainland Greece*, (London 1968), pp. 412, 419.
- 9) *ibid.*, pp. 420 - 436.
- 10) 木村重信「旧石器時代における芸術と宗教」比較芸術学研究 3 (美術出版社 1981), p. 96.
- 11) J. MELLAART, *AnSt* VII (1962), p. 52.
- 12) 木村重信 *ibid.*, pp. 93 - 94.
- 13) J. MELLAART, *Çatal Hüyük*, pp. 176-177.
- 14) Mircea ELIADE, *Traite d'histoire des religions*, (paris 1968) 久米博訳「豊饒と再生：宗教学概論 2」(せりか書房 1974), p. 21.
- 15) 木村重信「ヴィーナス以前」(中央公論社 1982).
- 16) J. MELLART, *Çatal Hüyük*, p. 181.
- 17) *ibid.*, p. 180. 本稿で対象とした偶像の外に、非常に粗雑な粘土製偶像が、第Ⅸ層以後の各層から出土しているが、詳しい報告がされておらず、本稿では扱っていない。
- 18) J. MELLAART, *AnSt* X III (1963), pl. XX-c.
- 19) J. MELLAART, *AnSt* X II (1962),
- 20) Ekrem AKURGAL, *Ancient Civilizations and Ruins in Turkey*, (Istanbul 1978), pp. 306 - 307; Emmanuel LAROCHE, "Recherches sur noms des dieux Hittites," *RHA* 46 (1946 - 47), pp. 17 - 18, 58; E. LAROCHE, "Les dieux Yazılıkaya," *RHA* 84 - 85 (1969), pp. 61 - 109.
- 21) J. MELLAART, *AnSt* X III (1963), p. 95.
- 22) Hâmit Z. KOSAY, *Türk Tarih Kurum tarafından yapılan Alaca Hüyük Kazısı. 1937 - 1939'daki Çalışmalara ve Kesifelere ait İlk Rapor*, (Ankara 1951).
- 23) J. MELLAART, *Excavations at Hacilar*, (Edinburgh 1970).
- 24) I. A. TODD, *Çatal Hüyük in Perspective*, (California 1967), pp. 50 - 51.
- 25) J. MELLAART, *AnSt* X III (1963), p. 95.
- 26) J. MELLAART, *Çatal Hüyük*, p. 166.
- 27) *ibid.*, pp. 204 - 205. 同一の床下から発見された遺体でも、本来の骨格の配列そのままのものと、配列が乱れたり、骨の数が不足するもの

がある。これはメラートが言うように、ある一定の時期にしか埋葬が行われなかったためと考えられる。

- 28) J. MELLAART, *AnSt* XIV (1964), p. 78.
- 29) J. MELLAART, *AnSt* XVI (1966), p. 183.
- 30) J. MELLAART, *Çatal Hüyük*, p. 82.
- 31) J. MELLAART, *AnSt* XIV (1964), p. 81.
- 32) Perry A. BIALOR, "The Chipped Stone Industry of Çatal Hüyük," *AnSt* XII (1962), p. 69.
- 33) J. MELLAART, *AnSt* XVI (1966), p. 183.
- 34) J. LAWRENCE ANGEL, "Early Neolithic Skeletons from Çatal Hüyük; Demography and Pathology," *AnSt* XXI (1971), p. 82.
- 35) *ibid.*, pp. 82 – 83; J. MELLAART *Çatal Hüyük*, p. 206.
- 36) I.A. TODD, *ibid.*, p. 123.
- 37) *ibid.*, p. 124.
- 38) William ALLAN, "Ecology, Techniques and Settlement Patterns," P.J. UCKO ed., *Man, Settlement and Urbanism*, (London 1972), p. 214.
- 39) I.A. TODD, *ibid.*, p. 124.
- 40) J.L. ANGEL, *ibid.*, p. 89.
- 41) I.A. TODD, *ibid.*, p. 125.
- 42) J.L. ANGEL, *ibid.*, p. 82.
- 43) I.A. TODD, *ibid.*, p. 125; E.B.W. ZUBROW, "Carrying Capacity and Dynamic Equilibrium in the Prehistoric Southwest," *American Antiquity* 36/2 (1971), p. 130.
- 44) I.A. TODD, *ibid.*, p. 136.
- 45) David H. FRENCH, "Settlement Distribution in the Konya Plain, South Central Turkey," P.J. UCKO ed., *Man, Settlement and Urbanism*, (London 1972), p. 232.
- 46) I. A. TODD, *ibid.*, p. 72.
- 47) J.L. ANGEL, *ibid.*, pp. 89 – 90.
- 48) 木村重信「生活の造形(3)人形」華道39/3(1977), pp. 4–6.

呪術的機能をもつ人形(ヒトガタ)は、神像・仏像・肖像を含めた人像彫刻から、次の3点により区別される。

1. 呪術的儀礼に関与した人、すなわち人形(ヒトガタ)を代理とした人とのみ関わり、非常に個人的である。
2. 現実的効果の観念を伴う呪術儀礼に用いられるため、人形の「現

在」のみが求められ、一回限り、一時だけの命である。

3. 個人的であり、一時的であるが故に、人形は物質的に短命である。すなわち、材料として用いられる物質は、比較的壊われやすく、サイズも小さい。

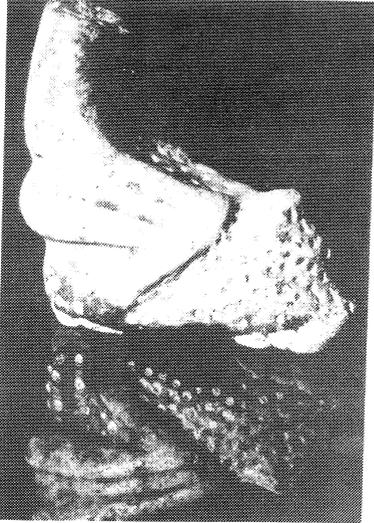
(大学院学生)

図版

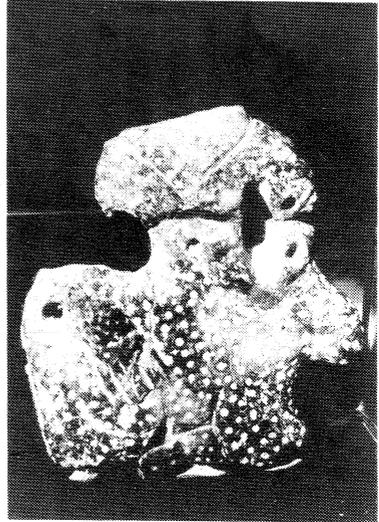
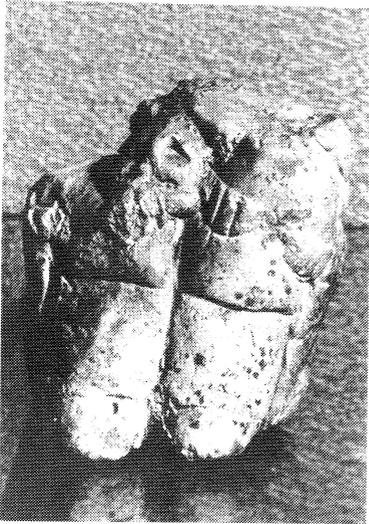
1. 編年表 (J. MELLAART, *Çatal Hüyük*, <London 1967>, p. 52)
2. 男性像 Çatal Hüyük VIA. 8 黒石 11cm。
3. 男性像 Çatal Hüyük VIA. 10 石灰石 5.6cm。
4. 女性像 Çatal Hüyük VIA. 10 石灰石 11cm。
5. 女性像 Çatal Hüyük III 1 焼成粘土 7cm。
6. 女性像 Çatal Hüyük II 1 焼成粘土 16.5cm。
7. 女性像 Çatal Hüyük II 1 焼成粘土 5cm。
8. 女性像 Çatal Hüyük VI A. 61 焼成粘土 4.1cm。
9. 女性像 Hacılar I 焼成粘土 左3.7cm 右4.5cm。
10. 双偶 (5対) Alaca Hüyük c. 2500 ~ 2200 B.C. 金。
(以上2~10は、アナトリア文明博物館所蔵。写真は 大村次郷氏)
11. 壁面浮彫り女性像 Çatal Hüyük VII. 23 漆喰 (J. MELLAART, *Çatal Hüyük*, pl. VII)
12. 壁画 (狩猟図) Çatal Hüyük FV.1 (J. MELLAART, *AnSt XVI* <1966>, pl. LI)
13. 壁画 Çatal Hüyük VII. 14 (J. MELLAART, *Çatal Hüyük*, pl. 60)
14. 壁画 Çatal Hüyük VII. 8 (*ibid.*, pl. 49,)
15. 壁画 (模写) Çatal Hüyük VIB.1 (I. A. TODD, *Çatal Hüyük in Perspective*, <California, 1967>, Fig. 35)

Chronological Table

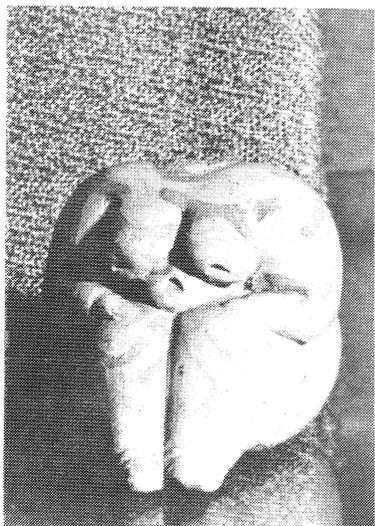
HACILAR		
c. 5000 BC	
	Id	
	-Ic	
c. 5250	<u>Ia 5247±119</u>	<i>Radiocarbon dates in italic type.</i>
	IIb	<i>→extreme tolerance.</i>
c. 5435	<u>IIa 5434±131</u>	<i>All dates calculated with half-life of</i>
	III	<i>5730.</i>
c. 5500	IV	<i>Doubtful dates in brackets.</i>
c. 5600	V	
	<u>VI 5620±79</u>	
	VII	ÇATAL HÜYÜK
	VIII	O
	IX 5614±92	I
	→5706	
c. 5700	c. 5720
		<u>II 5797±79</u>
		c. 5750
		<u>III</u>
		5807±94
		c. 5790
		<u>IV (6329±99)</u>
		c. 5830
		V 5920±94
		c. 5880
	
		VI A 5781±96 destruction
		5800±93
		5815±92 beginning
		5850±94
		c. 5950
		<u>VI B 5908±93</u>
		5986±94 beginning
		c. 6050/6070
		<u>VII 6200±97 (?)</u>
		c. 6200
	
		VIII
		c. 6280
	
		IX 6486±102
		c. 6380?
	
		X 6385±101
		c. 6500
	
		Pre-X floor levels (not yet dated)



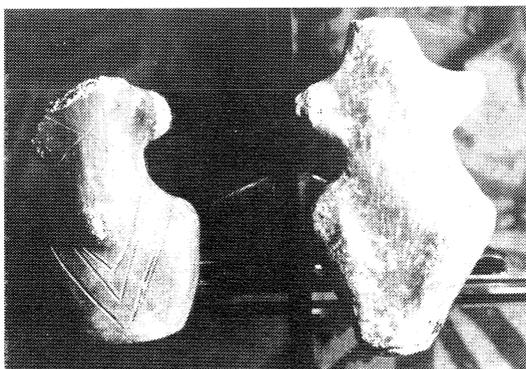
$\frac{3}{5} \mid \frac{2}{4}$





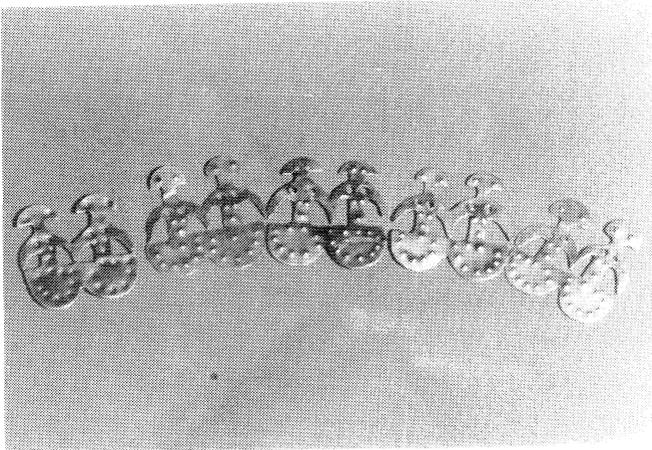


8|7
9



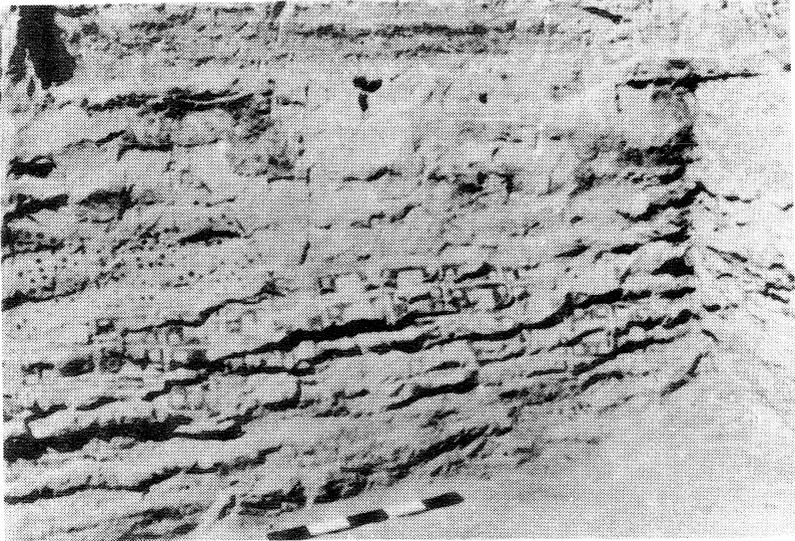


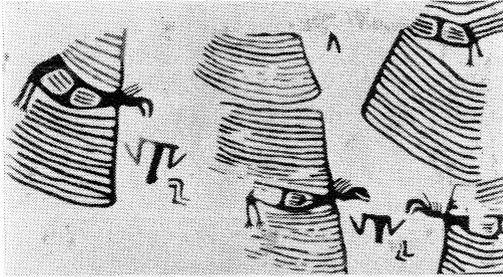
$\frac{11}{10}$





$\frac{12}{13}$





14
15

